

# 連体修飾における形容詞のテ形修飾とイ形修飾

吉田妙子

政治大学講師

## 1. はじめに

テ形で二つの形容詞を「並列」する用法は、前の形容詞と後の形容詞の独立性が共に高いようである。また、他の用法に比べて統語的な制約が少ないため誤用も少なく、問題が比較的起こりにくい用法であるようだ。しかし、形容詞の独立性が高いというのは構文上のことであって、前後の形容詞の意味関係が全然無関係に孤立しているわけではない。全然無関係でないので、やはりある統語的な関係が見いだされるはずである。本稿では連体修飾節における形容詞のテ形修飾とイ形修飾の相異についての観察を手がかりにしつつ、「並列」のテ形の制約を考察していこうと思う。

「並列」形容詞の用法の特徴を考える時、連体修飾節におけるテ形接続と連体形接続の問題が考えられるが、述定形容詞（注1）としての用法の文では、

(1)このトマトは、赤くて大きい。

としか言えなくても、装定形容詞としての用法の文では、

(1a)赤くて大きいトマト

(1b)赤い大きいトマト

のように両様の表現ができる。両者の差異はどこにあるのか？

山田（1995）は「赤クテ大キイ本」と「赤ク大キイ本」と「赤イ大キイ本」の三者を比較して、装定形容詞としての用法が並列された時に前項が三者のうちどのような形態を取るかを調べている。これは統語構造と語彙の面から考察されたものであるが、テ形の機能の面からも検討を加える必要があると思われる（注2）。なお、こ

ここでは山田（1995）の提起する「赤く大きいトマト」といったような前項が連用形の場合は、この論考の目的とずれるので考察に入れない。

以後、形容詞類をA (djective)、動詞をV (erb)、被修飾名詞をN (oun)、前項をF (ront)、後項をB (ack)、とする。また、a類はテ形接続の連体修飾節、b類は連体形接続の連体修飾節、a'類はa類の前項と後項の順序を換えたもの、b'類はb類の前項と後項の順序を換えたもの、とする。

神尾（1983）は、「美しく青い海」と言う場合は前項形容詞「美しい」と後項形容詞「青い」が同等の資格を以て名詞「海」を修飾している（ $\langle A_1 \text{テ} A_2 \rangle \cdot N$ ）が、「美しい青い海」と言う場合は「青い海」という一つの名詞句を「美しい」が更に修飾する（ $A_1 \cdot \langle A_2 \text{イ} / \text{ナ} N \rangle$ ）、としている。神尾のこのような考え方について、山田（1995）は形容詞相互および形容詞と被修飾名詞間の語彙的關係を考えていない、と批判して（p. 401）（注3）、前後の形容詞、被修飾名詞のいろいろなケースの例を考察する。結論として山田は、 $A_1$ がテ形の場合には $\langle A_1 \text{テ} A_2 \rangle \cdot N$ の構造になるが、 $A_1$ が連体形の場合には $\langle A_1 \text{イ} / \text{ナ} A_2 \rangle \cdot N$ の場合と $A_1 \cdot \langle A_2 \text{イ} / \text{ナ} N \rangle$ の場合が両様考えられる、と述べている（注4）（p. 406）。

しかし、筆者はこれを分析する時に、さらにテ形接続のもたらす意味関係を検討する必要があるのではないかと考える。テ形接続か連体形接続かが問題になるのは、前項と後項の形容詞が表わす意味に同時性のある場合に生じる問題であると思われるので、ここでは連体修飾をなす二つの節が「時間的継起」をなす場合は除外して、「起因的継起」・「付帯状況」と「並列」の場合を考察する。

また、テ形修飾とイ形修飾の違いをはっきりさせるために、形容詞類だけでなく、名詞・動詞類のテ形修飾と連体形修飾にも言及することになるであろう。

## 2. 修飾節内部の二節が「起因的継起」をなす場合

### 2-1. 原因が静的述語の場合

まず、最もオーソドックスな、テ形の前項・後項がともに形容詞類の場合を考える。

(2a) 小さくて赤い辞書 (○)

(2b) 小さい赤い辞書 (○)

これらはどちらも成立する。ここに、神尾 (1983) の言うような  $A_1 \cdot \langle A_2 \text{イ} / \text{ナ} N \rangle$  の構造は、いかにして読み取れるだろうか。二つの文の装定形容詞を述定形容詞にしてみると、(2a)は「辞書は小さくて赤い」と言い換えることができるが、(2b)は「辞書は小さい赤い」と言い換えることはできず、「赤い辞書は小さい」としか言い換えることができない。その点で、神尾の分析は一応道理にかなったものだとも言えよう。(この点については、5-4で詳述する。)

次に、テストの方法として、前項後項交換テストが有用であろうと考え、試みる。

(2a') 赤くて小さい辞書 (○)

(2b') 赤い小さい辞書 (○)

これらも、問題なく成立する。しかし、前項と後項に起因的關係がある場合は、少々様相を異にするようである。次にそのようなテ形接続の例をいくつかあげてみる。

(3a) 小さくて携帯しやすい辞書 ( $A_1 \text{テ} A_2 \cdot N$ )

(4a) 軽くて子供でも持てるパソコン ( $A \text{テ} V \cdot N$ )

(5a) おいしくてつい全部食べてしまったケーキ ( $A \text{テ} V \cdot N$ )

(6a) もてていい気になっている女 ( $V_1 \text{テ} V_2 \cdot N$ )

これらを連体形接続にしたらどうであろうか。

(3b) 小さい、携帯しやすい辞書 (○)

(4b) 軽い、子供でも持てるパソコン (○)

(5b) おいしい、つい全部食べてしまったケーキ (○)

(6b)もてる、いい気になっている女 (○)

この中で、(3b)と(4b)の前後形容詞は「並列」の関係にあるのでテ形による接続を許し、前後の順序を換えてb'類にすることはできるがa'類にすることはできず、(5b)と(6b)は原因・結果の関係にあるので接続助詞ノデの挿入を許し、前後の順序を換えてb'類にすることはできるがa'類にすることはできない。

(3a')携帯しやすくて小さい辞書 (×)

(4a')子供でも持てて軽いパソコン (×)

(5a')つい全部食べてしまったおいしいケーキ (×)

(6a')いい気になっていてもてる女 (×)

(3b')携帯しやすい小さい辞書 (○)

(4b')子供でも持てる軽いパソコン (○)

(5b')つい全部食べてしまったおいしいケーキ (○)

(6b')いい気になっているもてる女 (○)

これらの文例は、前出の神尾(1983)の「美しい青い海」で見たようなF・<B・N>の構造(神尾の言うA<sub>1</sub>・〈A<sub>2</sub>イ/ナN〉の構造)が明らかに感じられるのではないだろうか。すなわち、連体形修飾節「携帯しやすい」「子供でも持てる」「つい全部食べてしまった」「いい気になっている」が名詞句「小さい辞書」「軽いパソコン」「おいしいケーキ」「もてる女」をそれぞれ修飾する関係にあると考えられる。英語の関係代名詞風の表現をすれば、(3b')の「携帯しやすい小さい辞書」は「携帯しやすいトコロノ小さい辞書」とでも言えるような関係であり、(5b')の「つい全部食べてしまったおいしいケーキ」は「つい全部食べてしまったグライニおいしいケーキ」とでも言えるような関係であろう。

(3b)(4b)(5b)(6b)の場合は前項が後項の根拠として、つまり二つの属性ではなく一つの属性の二つの側面として、一続きの連体修飾節として意識されている。前項・後項に因果関係のような一定の意味関係がある場合、テ形を用いると即座にかすがいのような役割を果たして意味関係を固定するのである。つまり、前後の意味関係に

よって修飾部にテーマ性が発生する。それ故、交換後はその結びつきがくずされて、語彙的關係がくずれてしまうのである。

これに対して、(3b')(4b')(5b')(6b')の前項と後項は關係が考察されておらず、二つの属性は別々に意識されており、ただ反省的に語彙的近似關係が認められるのみである。それが前項・後項を交換すると、F・〈B・N〉の構造が発生する。それは何故か？

前項の原因が静的述語である場合、前項は被修飾名詞の属性であるという性質を帯びやすい。そして結果たる後項は属性から派生した様態であるという性質を帯びやすい。それだから、前項と後項を交換するや否や、後項(交換前の前項)は被修飾名詞のもともとの属性としてまず〈F・N〉の關係が安定し、続いて前項(交換前の後項)は派生的性質として名詞句〈F・N〉を外から修飾するという第二次修飾關係が発生するのである。

このように、前項が静的述語でしかも前項が後項の原因と考えられる關係の連体形修飾節においては、交換するとF・〈B・N〉の構造になりやすいようである。

## 2-2. 原因が動的述語の場合

原因が動的述語の場合は、さらに趣を異にする。

(7a) 飢え死に~~して~~しま~~って~~かわいそうな子たち (VテA・N)

(8a) 母が去~~って~~行~~って~~悲しかった日 (VテA・N)

(9a) 屋上から落~~ちて~~全身打撲で死んだ男 (V<sub>1</sub>テV<sub>2</sub>・N)

(10a) 叱~~られて~~家を飛~~び出~~した子 (V<sub>1</sub>テV<sub>2</sub>・N)

これらを連体形修飾にしてみる。

(7b) 飢え死に~~して~~しま~~った~~かわいそうな子たち (○)

(8b) 母が去~~って~~行~~った~~悲しかった日 (?)

(9b) 屋上から落~~ちた~~全身打撲で死んだ男 (×)

(10b) 叱~~られた~~家を飛~~び出~~した子 (×)

明らかに前二者(後項が静的述語)と後二者(後項が動的述語)の場合で違うことがわかる。

まず、後項が動的述語の場合は、これまでの例と違って、何故b類が正しくなくなるのであろうか。連体形修飾の場合は、1-1で述べたように、F・〈B・N〉になり得る構造がひそんでおり、後項述語が被修飾名詞の第一属性という性質を帯びやすい。前項・後項ともに動的述語の場合は、おのずから動作の順序が問題になってくるから、どちらが先かといえども第一属性である述語が先ということになってしまう。そこで、(9b)(10b)のような場合はあたかも「全身打撲で死んだ男が屋上から落ちた」り、「家を飛び出した子が叱られた」りするような、実際の順序と逆転した印象を与えてしまうのである。

また、(7b)が(7a)と変わらない自然さを有しているのは、次のような事情からであろう。静的述語は、もともと超テンス的な側面を持っている。連体形修飾の場合はもともとF・〈B・N〉構造が強く感じられやすい上、後項が静的述語である場合は前項のテンス性と抵触することがないから、前項・後項の先後関係が問題にならない。それ故、(7b)は自然になる。その証拠に、(8b)のように後項の静的述語にテンス性が入ってきて「悲しかった」となると、たちまちおかしいことになってしまう。(8b)は、次のように後項のテンス性を取り去れば、おかしくなくなるのである。

(8c)母が去って行った悲しい日 (○)

すなわち、「起因的継起」で前項が静的述語の場合は原因と結果に時間的な継起関係が生じ得ないのでa類とb類が同値になりやすく、前項が動的述語の場合は原因と結果に時間的な継起関係が生じやすいのでa類とb類が同値になりにくい、と言えるだろう。

さて、これらを交換した場合、a'類は1-1で見てきたように明らかに非文になるか、因果関係がくずれてしまう。

(7a')かわいそうで、飢え死にしまった子たち (×)

(8a')悲しくて、母が去っていった日 (×)

(9a')全身打撲で死んで、屋上から落ちた男 (×)

(10a')家を飛び出して、叱られた子 (×)

では、これらの連体形修飾文の前項と後項の順序を交換してみよう。

(7b') かわいそうな、飢え死にしてしまった子たち

(8b') 悲しかった、母が去っていった日

(9b') 全身打撲で死んだ、屋上から落ちた男

(10b') 家を飛び出した、叱られた子

これらは、(7b')(8b')が後項が前項より長い関係でやや不自然なもの、ほぼ問題なくF・<B・N>構造になり得ると言える。

なお、VテA・N構造の次のような例は、a類からb'類に転換する時、いろいろな誤解が生じやすいから注意を要する。

(11a) 花が咲いていてきれいな公園

これを連体形修飾にすると、

(11b) 花が咲いているきれいな公園

となるが、a類では「公園」が「きれい」な理由は「花が咲いている」からであるが、b類ではそうとは限らない。しかし、(11b)のような例は前項と後項の関係が起因的ではなく、並列的である。(「並列」の関係については、1-5で後述する。)

また、これらの前項と後項を交換すると、次のようになる。

(11a') きれいで花が咲いている公園 (?)

(11b') きれいな、花が咲いている公園 (?)

明らかに(11a')は、よほどの文脈に支えられていなければ不自然な文である。(11b')は、区切り方によっては「きれいな」が後続の「花」を修飾しているような印象にもなりかねないであろう。

### 3. 修飾節内部の二節が「付帯状態」をなす場合

「付帯状態」のテ形の文では前項が後項の従属節と位置づけが決まっているわけだから、理論上は連体形接続にはなり得ない。

しかし一方で、「付帯状態」のテ形の文では、前項と後項が同時発生するのであるから、連体形接続が何らかの形で入りこむ可能性も出てくる、とも言える。

- (12a) 人目を忍んで二人がひっそりと逢引きを続ける姿  
 (12b) 人目を忍ぶ、二人がひっそりと逢引きを続ける姿 (×)  
 しかし、前項と後項を交換すると、やや事情が違ってくる。  
 (12a') 二人がひっそりと逢引きを続けて人目を忍ぶ姿 (×)  
 (12b') 二人がひっそりと逢引きを続ける、人目を忍ぶ姿 (○)

これも、FテB・N型一般の文と事情を一にしている。言えそう  
 だ。つまり、連体形修飾節の前項と後項を交換すると、F・<B・  
 N>の構造が読み取れるのである。「付帯状態」は前項と後項が同  
 時であるゆえ、前項が被修飾名詞の属性ととらえることもできる場  
 合もあるからであろう。特に、被修飾名詞が人であり、前項付帯状  
 態が仁田(1995)の言う「し手容態」や「心的態度」を表す場合に  
 は、前項が人の属性と考えられやすいであろう。

- (13a) がんばって二人分の荷物を運ぶ男  
 (13b') 二人分の荷物を運ぶがんばる男 (○)

ただし、「付帯状態」でも主体の様態的なあり方を示しているの  
 でないものは、転換が難しい。

- (14a) 弱い電灯をつけて、前後不覚に眠っている彼  
 (14b') 前後不覚に眠っている、弱い電灯をつけている彼 (×)

#### 4. a類→b'類への転換の制約

これまでに、「起因的継起」と「付帯状況」のあるものを示す連  
 体修飾節において、a類とb'類が同値であることを述べた。た  
 だし、これはすべての連体修飾において妥当性を持つわけではない。  
 次に、a類からb'類への変換が不可能と思われる場合をいくつか  
 あげる。

一つは、前項と後項の長さの制約である。

- (15a) 底が大きくて涼しい家 ( $A_1$ テ $A_2$ ・N)  
 (16a) のどごしがすっきりとさわやかでいける酒 (AテV・N)  
 (17a) どこへ行っても男にもてていい気になっている女 (VテV  
 N、Vが静態)



(18a) みんなの前で転んで泣きだした弟 (VテV、Vが動態)

(19a) 不眠不休でがんばって家を建てた父 (「付帯状態」)

これらは、前項の述語にさまざまな補語がついていて、後項より長い場合である。これをb'類に転換するとどうであろうか。

(15b') 涼しい、庇が大きい家 (?)

(16b') いける、のどごしがすっきりとさわやかな酒 (?)

(17b') いい気になっている、どこへ行っても男にもてる女 (?)

(18b') 泣きだした、みんなの前で転んだ弟 (?)

(19b') 家を建てた、不眠不休でがんばった父 (?)

これらのあるものは不自然な表現になり、あるものは不自然にならないまでもF・〈B・N〉の関係を読み取るにはかなり努力がいる結果となる。原因となる前項が長い場合、F・〈B・N〉の構造は認められにくいようである。これらは、前項を長くするか後項を短くすれば、座りのいい文になる。

(15b'') 陽がさえぎられて涼しい、庇の大きい家 (○)

(16b'') 冷やでもいける、のどごしがさわやかな酒 (○)

(17b'') 身の程知らずにいい気になっている、男にもてる女 (○)

(18b'') 火のついたように泣きだした、転んだ弟 (○)

(19b'') 庭付き一戸建の家を建てた、がんばった父 (○)

第二に、後項の述語の語彙的な制約である。

(20a) 門の前に車を止められて迷惑している人

(20b) 門の前に車を止められた迷惑している人 (?)

(20a') 迷惑していて、門の前に車を止められた人 (×)

(20b') 迷惑している、門の前に車を止められた人 (?)

この例は、a'類はもとより、b類、b'類でさえ奇異に感じられる。「迷惑している」という述語は、ある意味で1-1で述べた「内容を求める述語」にあたるであろう。ただし、「どのように」という内容でなく、「どうして」という原因を求める述語である。「迷惑している」と言えば「何が原因で？」という疑問が必ず起こってくるし、「迷惑している人」というだけでは非文にはならない

が、文脈の助けがないとその人の状況を具体的にイメージすることはできない。(20a)の前項と後項の起因的關係は、前述「起因的継起」の例の(3a)(4a)(5a)(6a)よりも密接で、後項は前項がなくして自立することができないものとなっている。それ故、前項と後項が被修飾名詞の二つの属性を別々の意識で語っているような連体形修飾の文にしてしまうと、「迷惑している」が宙に浮いた感じになってしまう。それ故、(20b)は不自然に感じられてしまうのである。そして前項と後項の起因的結びつきがあまりにも即自的なので、前項と後項を交換した(20b')のような文はなおさら不自然に感じられてしまうのである。これがもし、

(21a) 門の前に車を止められて、顔を真っ赤にして運転手に抗議している人

のような例であったら、前項と後項の派生關係は(20a)ほど即自的ではないので、b'類に転換することが可能である。

(21b') 顔を真っ赤にして運転手に抗議している、門の前に車を止められた人 (○)

「迷惑している」のような述語は、ある事態が生じたときにそれに派生して生ずる即自的な感情を示す述語が多いようである。「困った」「うれしい」「悲しんでいる」などなど。これらは「起因的継起」を示すテ形の特徴的な性質を示すものであろう。

第三に、統語的な制約である。

「起因的継起」において、a類(テ形接続の連体修飾節)をb'類(連体形接続の連体修飾節の前項と後項を転換した後の文)に転換した後、F・<B・N>の構造になる条件は、被修飾名詞の性質にも関係がある。上記のことが成立するのは、被修飾名詞(底の名詞)が前項の成分でもあり後項の成分でもある場合のみである。このことは、被修飾名詞が寺村(1975)の言う「外の関係」にある場合でも「内の関係」にある場合でも、同様である(注5)。

(22a) 台風が来て飛ばなくなった飛行機(「起因的継起」・「内の関係」)

(23a) ボーイフレンドが来なくて彼女ががっかりしている顔  
(「起因的継起」・「外の関係」)

(24a) がんばって父が建てた家 (「付帯状況」・「内の関係」)

これらの文の被修飾名詞「飛行機」「顔」「家」は、後項だけの成分であって、前項の成分ではない。この場合、連体形接続にして前後を転換すると、

(22b') 飛ばなくなった、台風が来た飛行機 (×)

(23b') 彼女ががっかりしている、恋人が来ない顔 (×)

(24b') 父が建てた、がんばった家 (×)

などと、変な文ができてしまう。被修飾名詞が前項節の成分になっていない場合、交換されて後項に位置した節が直後に来る名詞を修飾するというのは、理論的に不可能である。

## 5. 修飾節内部の二節が「並列」をなす場合

以上、連体修飾節におけるテ形接続と連体形接続を比較し、そこにいくつかの違いがあることを見てきた。

ひとつは、修飾構造の違いである。

二つ以上の節による連体修飾節において連体形接続が成立しやすいのは、「起因的継起」および「付帯状態」のテ形接続の前項と後項を交換した時であった(ただし、交換前の前項が後項より相対的に長い時は成立しにくく、底の名詞が交換前の前項の成分でない場合は成立不可能である)。それは、テ形接続の前項と後項を交換した後は、 $F \cdot \langle B \cdot N \rangle$ 構造が感じられるからであった。それ故、 $F \cdot \langle B \cdot N \rangle$ が感じられるのは連体形接続の場合である、ということが言えよう。

しかし一方で、「赤くて大きいトマト」と「赤い大きいトマト」との間には、よほどの文脈の差がない限りは同値と考えられ、また「赤い大きいトマト」に $F \cdot \langle B \cdot N \rangle$ 構造が存在するという構文的裏付けもない。このことから、この小論での考察は、連体形接続には $F \cdot \langle B \cdot N \rangle$ 構造と $\langle F \cdot B \rangle \cdot N$ 構造の両方になる場合が

あるが、テ形接続には<F・B>・N構造にしかならない、という山田(1995)の結論を裏書きした結果になったと言えよう。

それでは、テ形接続の場合と連体形接続が同値になる「赤くて大きいトマト」と「赤い大きいトマト」のような場合、その意味的な違いは何か、という問題が起こってくるが、それこそが本節の「並列」の用法においてテ形接続による修飾節と連体形接続による修飾節はいかに違うか、という問題にかかわってくるのである。

### 5-1. 「並列」のテ形接続の超時的テーマ性

テ形はそれ自体にももとの意味はなく、ただ文を中止する機能を持つのみである、と言われていることは、繰り返し述べてきた。しかしそれならば、テ形によってむやみに文を中止して次々に好き勝手に新しい内容を付け加えてもいいのだろうか。テ形の「付帯状態」「時間的継起」「起因的継起」の用法は、前項と後項の意味的連関からおのずから付け加える内容に制限が働く。これらの用法と違って、テ形の節相互の独立性の高い「並列」の用法の場合は、内容の制限が見えにくいのである。

本章では、三つ以上の節による連体修飾節を検討してきた。それを土台にして、次に「並列」のテ形におけるテーマ性ということを考えてみたい。

「並列」の用法では、前項と後項が同時発生のもものが多い。それ故、状態性の述語が多いようである。そのような述語のテーマ性を考えてみる。

(25)この部屋は、小さくて暑い。

(26)この部屋は、大きくてがらんとしている。

この例の(25)では、暑苦しい部屋に対する不満、(26)では何もない部屋の寒々しさといったものが感じられる。

しかし、次のような例は少々違和感がある。

(27)この部屋は、大きくて暑い。(?)

(28)この部屋は、小さくてがらんとしている。(?)

これらは、「小さい」＝「暑苦しい」、「大きい」＝「がらんとして寂しい」という常識的な語彙的關係から何か違和感を感じるのである。

また、次の例は語彙的關係あるいは文脈によってテーマ性が支えられている。

(29)きょう、彼女は白いスーツを着て、髪を束ねています。

これは、「今日の彼女のいでたち」というテーマが文脈によって感じられるので、テ形接続が用いられるのである。

時間のずれのあるものでは、次のような例がある。

(30)あしたは家の大掃除もして、銀行にも行って、それから区役所で住民登録もしなくちゃならない。

これは「あしたするべきこと」というテーマで、実際に行為する時の時間のずれはあるが、話者の意識の中では同時に存在しているのである。

さらに「対比」と呼ばれる次の例がある。

(31)数学の授業では、先生が質問して、学生が答えました。

これは、何らかのテーマ（この場合は「数学の授業」の方式）を中心に対比性が感じられるものである。(30)も(31)も、前項と後項の実際の発生時間にずれはあっても、中心に意識されるテーマ性のために超時間的なものを感じさせる。

しかし、次のような例は問題がある。

(31')きのうの数学の授業で、先生が質問して学生が「わかりません」と答えました。(×)

このように個別的・一回的な事実を述べるものは、テーマ性がくずれるので使えない。

このように、「並列」の用法のテ形には、ある一時点での一回的な事実でなく、何らかの意味で超時的なテーマ性を備えているのである。

## 5-2. テ形修飾と連体形修飾の差異

「並列」の場合は前項と後項の独立性が高いことから、無条件で転換可能である。それだけに、「並列」においてはテ形修飾とイ形修飾は、他のどの用法におけるよりも近くなってくる。それ故、他の用法の場合になかった「テーマ性」という概念が必要になってくる。

最初の例にもどろう。

(1a) 赤くて大きいトマト

(1b) 赤い大きいトマト

この二つの名詞節を、次の文脈の中で用いてみる。

(1aa) 庭に、亡くなった父の大事にしていたトマトの実がなりました。赤くて大きいトマトでした。

(1bb) 庭に、亡くなった父の大事にしていたトマトの実がなりました。赤い大きいトマトでした。

これは、どちらも自然に感じられる。テ形が話し言葉でよく用いられるのに対し、連体形や連用中止形は書き言葉で好んで用いられるので、文学的表現としては(1bb)の方が適切と言えるかもしれないだろう。

しかし、次の文脈ではどちらがより自然であろうか。

(1aaa) 八百屋「奥さん、このトマト、5つ百円でいいよ。」

客 「あら、いやだわ、こんな栄養不良みたいなの。もっと赤くて大きいトマトはないの？」

(1bbb) 八百屋「奥さん、このトマト、5つ百円でいいよ。」

客 「あら、いやだわ、こんな栄養不良みたいなの。もっと赤い大きいトマトはないの？」

明らかに、(1aaa)の方が自然と思われるだろう。一般に食用トマトは赤いことと大きいことがより理想的な属性と考えられる（少なくとも買物をする主婦の観点からすれば）。この時、トマトの修飾節にあるテーマが課せられる。トマトをある観点から見た場合に、理想的な属性として「赤い」と「大きい」が選ばれ、それが名詞に対する「並列」の一続きの修飾語としてテ形によって固定されるの

である。

つまり、 $A_1$ イ/ナ $A_2$ ・N型の連体形接続には、テーマ意識がない。つまり被修飾名詞の二つの属性を並べているにすぎない。これに対して、テ形接続を用いた場合は、必ずある観点からの属性叙述であると言うことができよう。「並列」のテ形は、前項と後項の独立度が高い用法であるが、やはりそこにはあるテーマという関係があるのである。

むろん、これは $A_1$ ・ $A_2$ ・N型に限らない。

(32a) 背が高くて、毎日大きな弁当を持ってくるあの子 (V・V・N型)

と言う場合、何となく不自然で座りの悪い文である。しかし、

(32aa) 山村君って知ってる？ ほら、背が高くて、毎日大きな弁当を持ってくるあの子。

という文脈ならば、自然に文意が理解できるであろう。つまり「並列」のテ形接続の場合は、よほどの文脈によってテーマが確認されない限り、不自然になるのである。

### 5-3. テーマの内在性と文脈依存性

次の3組の例を参照されたい。

(33a) この国に10年以上住んでいて、配偶者が日本国民である人は、日本国籍を取得することができる。(○)

(33b) この国に10年以上住んでいる、配偶者が日本国民である人は、日本国籍を取得することができる。(?)

(34a) S社が売り出して、和文英文変換が自在にできるワープロは、ありますか。(?)

(34b) S社が売り出した、和文英文変換が自在にできるワープロは、ありますか。(○)

(35a) S社が売り出して、P社が宣伝しているワープロ (○)

(35b) S社が売り出した、P社が宣伝しているワープロ (×)

(33)においてはテ形接続が自然に感じられ、(34)においては連体

形接続が自然に感じられるのは、何故だろうか。また、(34)と同じ前項を持つ(35)では逆にテ形接続が自然に感じられるのは何故か。

一つは、構文上の理由である。すでに見てきたように、連体形接続はF・〈B・N〉の構造を感じさせやすい。それは、BがNの属性を示し、Fがそれを外から修飾する、という関係である。いわばFとBは構文上対等にNを修飾しているのではない。しかし、(33)では前項「この国に10年以上住んでいる」と後項「配偶者が日本人である」が、ともに「日本国籍を取得することができる」ための同等の、どちらが欠けてもいけない条件なのである。それ故、修飾節の構文的非対等性を感じさせる連体形修飾ではまずいのである。

このことをもっとはっきり示しているのは、(35)である。(35)は「並列」の用法の中で「対比」と呼ばれる例に相当する。「対比」であるから前項と後項はまったく同じ位置づけであり、非対等性は必ず排除されなければならない。それで、(35)は(33)以上に連体形接続は許されないのである。

これに対して、(34)では前項と後項の対等性を保護すべき理由が見つけにくい例である。たとえば、話者にとって大切なワープロの要件が「和文英文変換が自由にできる」ということであって、発売元はS社でなくともよい場合、「S社が売り出した」という情報は単に店員に品物を特定させるために言明されたことになるが、こういった場合は、連体形接続の方が自然になるであろう。

今一つの理由は、文脈によるテーマ性の存在である。先に述べた前項修飾節と後項修飾節の対等性ということは、この二つの修飾節に共通のテーマ性ということに導かれているのである。

(33)では後半に「日本国籍を取ることができる」と、テーマが明示されている。「この国に10年以上住んでいる」と「配偶者が日本国民である」はともに「日本国籍をとることができる」条件なのである。このように、前項と後項は二項を結びつけるテーマがあってこそ対等性も保証され、テ形接続を用いた方が自然になるのである。



一方(34)は「S社が売り出した」と「和文英文変換が自由にできる」は結びつきの必然性がなく、話者はこの二つの性質を関連のないままワープロの特徴として思いつくまま述べたにすぎない。しかし、何らかの理由で前項「S社が売り出した」と「和文英文変換が自由にできる」が話者にとって同等の重要性を持ち得るような状況では、テ形接続も可能であろう。

(34c) 客 「S社が売り出した、和文英文変換が自由にできるワープロはありますか。」

店員「それはうちでは扱ってないんですが・・・N社が売り出したのではだめですか。」

客 「いえ、互換性の関係で、S社のでなければ困るんです。」

店員「S社の機種との互換性が必要なら、英文専用のワープロがありますが・・・」

客 「いえ、和文英文変換でなければだめなんです。S社が売り出して和文英文変換が自由にできるワープロでなければ、買っても意味がないんですから！」

このような文脈の中でのみ、テ形接続は可能であろう。(33)(35)のように二つの修飾節そのものの中にテーマ性が内在するならば修飾節の対等性は守られやすいが、前項と後項に共通のテーマ性が内在しない(34)のような例は、よほどの文脈がないとテ形接続は無理になるであろう。

テ形接続が可能になるのは、被修飾名詞についての何らかの条件性が求められる文脈の中でのみであり、文脈にテーマ性が必要とされず一回性のある形容が必要である時にはテ形接続は使えず、連体形接続が使われるのである。

このテーマ性ということは、久野(1983)が「動作のスコープ」と呼んでいるところのものである(注6)。久野も、「並列」のテ形接続が可能になるのは議論されている動作のスコープが言語的あるいは非言語的文脈からはっきりしている場合にのみ自然になる、

と言っている (p. 125)。

#### 5-4. 述語を持つ文との対応

テ形修飾の文「赤くて大きい本」を述定的用法の文にした場合、「この本は赤くて大きい」などの文になる。しかし、「赤い大きい本」などのイ形修飾の文を述定的用法にした場合は、どのような文が対応するのであろうか。

この対応を特定する時に、前項と後項の意味的連関を考えなくてはならない。ところで、「赤い本」という装定的用法に対して「この本は赤い。」などという述定的用法の文は「述語を持つ文」であるが、「荷物を担ぐ男」という名詞修飾節に対しては「あの男は荷物を担ぐ」という述語を持つ文が対応するように、述語とは形容詞とは限らない。「述定形容詞」という述語だけでは動詞述語をも持つ文を示すのに限界がある。そこで、以後、この論考では「名詞修飾節」に対応する「述語を持つ文」を、「述語文」と簡略に呼ぶことにする。

まず、前項と後項の意味関係が比較的明白である「起因的継起」の場合を見てみよう。

成立する連体形接続の連体修飾節のうち、a類からb'類に転換されたものについては、次のようになるであろう。

a類の文を述語文にすると、「NハFテBデアル」の型になる。そして、a類と同値のb'類の述語文も、同じく「NハFテBデアル」の型になる。たとえば、(3a)(4a)の例文である。

(3a) 小さくて携帯しやすい辞書

(4a) 軽くて子供でも持てるパソコン

これらは、

(3') この辞書は小さくて携帯しやすい。

(4') このパソコンは軽くて子供でも持てる。

のように、テ形のままで述語文に言い換えることができる。しかしb'類の例文は、どうであろうか。

(3b') 携帯しやすい小さい辞書

(4b') 子供でも持てる軽いパソコン

もまた同様に、

(3') この辞書は小さくて携帯しやすい。

(4') このパソコンは軽くて子供でも持てる。

のような述語文になるであろう。あるいはまた、

(3'') この辞書は小さいし携帯しやすい。

(4'') このパソコンは軽いし子供でも持てる。

と、前項形容詞の後に接続助詞などを挿入しなければ、述語文に言い換えることができない(注7)。

また、前項が動態の場合、a類とb類が同値になる場合がある。

(7b) 飢え死にしたかわいそうな子たち

このような例も、述語文にした場合は、a類の文と同じになる。

(7') あの子たちは、飢え死にしてかわいそうだ。

さらに、a類がb'類と同値になる限り、「付帯状況」の場合も同じことが言える。

(12b') 二人がひっそりと逢引きを続ける、人目を忍ぶ姿

(13b') 二人分の荷物を運ぶがんばる男

これらの述語文は、a類の述語文である次の例と同じになる。

(12') 二人は、人目を忍んでひっそりと逢引きを続けた。

(13') その男は、がんばって二人分の荷物を運んだ。

つまり、F・<B・N>構造が感じられる連体形接続の節で、BがNの第一属性にあたり因果関係や付帯状態の関係にあるものは、述語文でテ形接続を用いればよいことになる。

さて、前項と後項の関係が「並列」の場合はどうであろうか。前項と後項が独立的で一見何の意味関係もないように見える「並列」の関係の場合は、連体形接続に対応する述語文を見つけるのは困難なように思える。

まず、前項・後項とも静的述語の場合は、あまり問題はない。

(1a) 赤くて大きいトマト

(1b) 赤い大きいトマト

これらはどちらも、

(1') このトマトは赤くて大きい。

としてさしつかえないであろう。(1b)にも特にF・〈B・N〉とう構造は感じられず、どちらも〈F・B〉・Nの構造と感じられからだ。

次に、テ形接続と連体形接続の違いの焦点である(33)(34)の述文を考えてみよう。まず、両者とも、前項・後項の修飾節は後の詞を修飾する関係から、もともとの関係は次のように同等である

(33) ヤンさんは、この国に10年以上住んでいます。

ヤンさんは、配偶者が日本国民です。

(34) このワープロは、S社が売り出しました。

このワープロは、和文英文変換が自在にできます。

しかし、(33)(34)を接続して複文にする場合、おしなべてテ形接続でうまくいくというわけにはいかない。

(33') ヤンさんは、この国に10年以上住んでいて、配偶者が日本国民です。(○)

(34') このワープロは、S社が売り出して、和文英文変換が自在にできます。(×)

(34)は、次のように変換するのが最も自然であろう。

(34\*) ①このワープロは、S社が売り出したもので、和文英文変換が自在にできます。

②このワープロは、S社が売り出したんですが、和文英文変換が自在にできます。

前項の末尾に節としての区切りを入れる「～もので」を挿入し、あるいは独立度の高い「が」などの接続助詞を用いて文を二に区切って初めて自然な述語文になるのが、前項と後項が「並列の関係にある連体形修飾の修飾節の構文的特徴、すなわちテーマのない二つ以上の節による連体修飾節の構文的特徴である。前項後項が語彙的にも文脈的にももともと関連がないのだから、前項

後項の間に「～もので」「～のですが」などという区切りを設けても意味は変わらないはずだからである。修飾節においてテ形接続が適当か、連体形接続が適当か、ということが問題になる時、「NハFモノデ、Bデアル」「NハFナノダガ、Bデアル」などの形にすると述語文が定まるようなものは、連体形接続が妥当な節、すなわち前項と後項に一貫したテーマ性を持たない節、すなわちテ形接続ができない節である、ということができる。

ちなみに、(32)の文も、もともとの述語文は、

(32) 背が高いあの子。

毎日大きな弁当を持ってくるあの子。

となるわけであるが、それをテ形で結んで、

(32') 山村君は、背が高くて毎日大きな弁当を持ってくる。

とするのは、不自然である。

(32'') 山村君は、背が高い子で、毎日大きな弁当を持ってくる。

にして初めて自然である、とうことのできるのである。

ただし、前項と後項にかなり特殊な意味連関がある場合は、述語文で個々に接続を考えなければならないであろう(注8)。

### 5-5. 三つ以上の節による修飾

(36a) めがね売場にいて、ブルーのスーツを着ていて、背の高い女の人。

(36b) めがね売場にいる、ブルーのスーツを着ている、背の高い女の人。

今まで見てきたことからこれらの文を考えるなら、この二文の被修飾名詞に後続する述語は何だろうか。(36a)は条件性を示唆する述語、(36b)は一回性を示唆する述語がそれぞれ求められるであろう。

(36aa) めがね売場にいて、ブルーのスーツを着ていて、背の高い女の人を探しているんですが・・・

(36bb) めがね売場にいる、ブルーのスーツを着ている、背の高い

女の方は、何という名前ですか。

しかし、節が三つ以上の場合、(36bb)のように「～～いる、～～いる」と二つ連続するのを避けて、次のように表現することが可能である。

(36bbb)①めがね売場にいて、ブルーのスーツを着ている、背の高い女の方は、何という名前ですか。

②めがね売場にいる、ブルーのスーツを着た、背の高い女の方は、何という名前ですか。

節が三つ以上になる場合、話し言葉ではテ形接続の重複がある程度許されるのに対し、連体形接続の重複は比較的抵抗を生じやすらしく(注9)、修辞意識が働いて他の表現が用いられやすいようである。

## 6. 終わりに

テ形接続において、「起因的継起」や「付帯状態」の用法は、前項と後項形容詞の意味関係が明らかである。その意味関係は、いわば文の内部に見いだされる。ただし、テ形接続を用いて「起因的継起」や「付帯状態」の文を作る時、細かい統語的な制約があることも事実である。

これに対して「並列」の用法では、前項と後項形容詞の独立度が高く、特に統語的にも制約されないので、前項と後項の意味連関が意識されにくい。それ故、「並列」の用法だけ他の用法から独立した離れ小島のような印象を与えていたのである。

しかし、「並列」の前項・後項にもやはり意味関係は存在する。それは文の内部に見いだされるものは少なく、多くの場合は文脈など文の外部に見いだされるものである。文の外部から前項と後項を意味的に結びつけるその関係を本稿では「テーマ性」と名づけ、連体修飾節におけるテ形接続と連体形接続とを比較することによって「テーマ性」の存在を検討してきた。そして、「並列」の叙述内容は一回的・時間的な事実の叙述でなく、何らかの意味で超時性を持

ったテーマが存在することが明らかになったと思う（注10）。

「テーマ性」は、「並列」の用法から他の用法への連続を可能にする性質だと思われる。この性質は「時間的継起」の用法に連続するものと考えられるが、それは次の機会に考察したい。

## 注

- (1)山田孝雄（1908）は形容詞を用法によって二つに分類し、「赤い本」のように名詞を修飾する場合の形容詞を「装定形容詞」、「この本は赤い。」のように述語として用いられる場合の形容詞を「述定形容詞」と呼んでいる。
- (2)山田敏宏（1995）の考察は統語的・語彙的な面から形容詞・形容動詞のテ形修飾、イ形修飾、用中止形修飾のあり方を論じたものであり、さまざまな用法のあるテ形の前項・後項関係から焦点をあてて論じたものではない。テ形の用法は、前項・後項の意味関係によるところが多く、形容詞のテ形だけでは論じきれない。本稿ではテ形の機能を中心に考察を進めたので、形容詞類だけではなく動詞のテ形も取り上げた。
- (3)山田敏宏（1995）は『神尾（1983）の最も大きな問題点は、前項形容詞の形態における差異にのみ着目し、形容詞間、及び被修飾名詞との間の意味的關係は全く考察されていない点である。』と批判しているが、筆者はさらに、装定形容詞の述定用法との対応も考察に入れるべきだったと考える。
- (4)例えば山田敏宏（1995）は、神尾の挙げる「美しい青い海」という例について、『「美しく青い海」は、意味的には異なり、「青い海」という事物に対して、「美しい」と修飾しているという、まさに神尾の示した構造通りであるといっていよいであろう。・しかし、前項と後項を入れ替えた「青い美しい海」は、「美しい海」を「青い」が修飾していると言うよりも、どちらも一時

的な属性として並列的に修飾している・・・と考えた方が妥当である』と説明している（p. 406）。山田は神尾の上記の「美しい青い海」の構造の説明を、その『根拠が示されておらず、形態の相違を無理に構造に反映させているといった感が否めない。』と批判しているが、筆者は上記の山田の「青い美しい海」の構造の説明も、やや直観的な意味の結びつきで説明したきらいがあるように感じられる。

- (5) 寺村 (1973) は、底の名詞（被修飾名詞）が修飾節内部の述語の補語になるような関係を「内の関係」、底の名詞にどのような格助詞をつけても修飾部のどこにも納めることができないものを「外の関係」とし、前者においては修飾部は底の名詞を特定するものではあるがその内容にかかわらない「付加的修飾」関係にあるが、後者においては修飾部は底の名詞の内容を表す「内容補充的修飾」関係にあると説明している。（p. 110～111）
- (6) 久野 (1983) はテ形と連体中止形を比較する中で、「太郎ガピアノヲヒイテ、花子ガ歌ヲ歌ッタ」のような例では「ピアノ」と「歌」というように語彙的（あるいは常識的）関係から動作のスコープがあらかじめ限定されているから自然な文になるが、「太郎ガ足ノ骨ヲ折ッテ、花子ガ打撲傷ヲ受ケタ」というような例では文そのものの中で動作のスコープが限定されていないため「太郎と花子が二人だけで車に乗っていて事故にあってけがをした」という文脈がないと不自然である、と言っている（p. 125）
- (7) 厳密に考えれば、「この辞書は小さいし携帯しやすい。」の文が「携帯しやすい小さい辞書」と対応するかどうかは議論の余地がある。なぜなら「この辞書は小さいし携帯しやすい。」に対応するのは「携帯しやすいし小さい辞書」であるが、これは明らかに「携帯しやすい小さい辞書」と意味がずれてくるからである。「～テ」と「～シ」などの異同については別の機会に扱いたい。
- (8) たとえば、(11b)「花が咲く、きれいな公園」の場合は、「この公園は花も咲いているし、きれいだ。」などのように接続を工



夫しなければならぬだろう。

- (9) 強調の意味で同じ形容詞を重ねて連体修飾する場合、つまり山田(1995)の言う「2形容詞が同一の場合」(たとえば「長い長い坂」)はこれに該当しない。
- (10) この意味で、「並列」の用法における生起的関係は「同時的」と言うより「超時的」と言った方が適当なのではないかと考えられる。

[参考文献] (五十音順)

- 神尾昭雄(1983)『名詞句の構造』井上和子編「日本語の統語構造」三省堂
- 久野暲(1983)「日本文法研究」大修館書店
- 寺村秀夫(1975~1978)『連体修飾のシンタクスと意味その1~その4』大阪外国語大学研究留学生別科「日本語・日本文化」4~7所収
- 仁田義雄(1995)『シテ形接続をめぐって』仁田義雄編「複文の研究・上」所収 くろしお出版
- 山田敏弘(1995)『赤クテ大キイ本と赤ク大キイ本と赤い大きい本—装定用法の形容詞が並置された際の前項の形式—』宮島達夫・仁田義雄編「日本語類義表現の文法・下」所収 くろしお出版
- 山田孝雄(1908)「日本文法論」光文館

\*この論文を書くにあたって、詳細なご助言と励ましをくださった審査員の湯延池先生に、心からお礼を申し上げます。また論文のテーマのヒントをくださり中文要約にも力を貸してくださった輔仁大学の黄瓊慧先生にも、この場を借りてお礼申し上げます。

## 名詞修飾子句中的「テ」形連接與「イ」形連接

吉田妙子

政治大学講師

「赤くテ大きいトマト」和「赤イ大きいトマト」的差異在那裡？也就是說，修飾名詞的兩個形容詞以「テ」形連接與以「イ」形連接的時候，有什麼不同？

修飾名詞的兩個形容詞由表示「因果上的繼起」或「付帶狀態」的「テ」連接時，前項形容詞（X）與後項形容詞（Y）的修飾關係是<<XY>・N>，但是X與Y調換位置時其修飾關係則成為<Y<XN>>。這時候，二者的語意相當。但是，也有來自句法的約束，例如，當被修飾語名詞不能與前項形容詞形成構成成分時，這個句子無法成立。

兩個形容詞作為「並列」受前後項形容詞的主題性影響頗大。主題性內化於句中時、用「テ」形連接；但是依存於語境或上下文時，用「イ」形連接較為適當。

### [關鍵詞]

「テ」形連接、 主題的內化、 「イ」形連接、 「外」的關係、 主題的語境依存度、 「内」的關係、 述語文